

福原啓郎著

魏晉政治社會史研究

津田資久

I

本書は、複雑な曹魏・西晉史の流れを平易に説明され、斯界に好評を博された『西晉の武帝司馬炎』（白帝社、一九九五年）の著者である福原氏による論文集であり、当該時代を扱った日本國內において刊行された研究書としては、渡邊義浩『西晉「儒教國家」と貴族制』（汲古書院、二〇一〇年）に續く第二冊目の専著であると言える。⁽²⁾

本書の内容を紹介する前に、目次を確認すると次の通りである。なお、（一）内の西暦は各章の元となった論文の初出年などを示す。

序論（書き下ろし）

第一部 政治史篇

第一章 魏晉時代における肉刑復活をめぐる議論の背景

—— 廷議における賛成派と反対派の論據の分析を中心——（一九八七年、一九九七年）

第二章 曹魏の明帝 —— 奢靡の皇帝の實像 ——（二〇〇〇年）

第三章 西晉における國子學の創立に關する考察（一九九七年、一九九八年）

第四章 晉辟雍碑に關する考察（一九九八、二〇〇九年）

第五章 八王の亂の本質（一九八二年）

第六章 西晉代宗室諸王の特質 —— 八王の亂を手掛りとし ——（一九八五年）

第二部 社會史篇

第七章 賈誼の二十四友をめぐる二三の問題（二〇〇九年）

第八章 西晉の貴族社會の氣風に關する若干の考察 —— 『世說新語』の儉嗇篇と汰侈篇の檢討を通して ——（一九九一年）

第九章 『錢神論』の世界（一九九二年）

第十章 『釋時論』の世界（二〇〇八年）

第十一章 西晉の墓誌の意義（一九九三年）

結語（書き下ろし）

あとがき

参考文献一覧

人名索引

中文摘要

中文目錄

右の要旨をまとめると、以下のようになる。

序論の前半では、まず本書で扱う「魏晉」とは、曹魏・西晉であることが表明される。そしてこの時期は内藤湖南の時代區分における古代（上古）から中世（中古）への過渡期に當たる⁽³⁾。「古

代の殘滓と中世の萌芽がせめぎあう故の複雑な様相が想定される」時代であることが指摘された上で、この時代に立ち現れる「貴族」に關して、「京都學派」の論點から貴族制論の整理が行われている。後半部分では、魏晉史を論ずるに當たつて不可缺である史料に關して、文獻史料・「文書」史料・金石（石刻）史料・考古史料の特徴と問題點が列擧され、最後に各章の要旨と、それらの研究テーマに對する著者の視座が語られている。

第一部「政治篇」の最初に配置されるのが、第一章の後漢末から東晉に繰り返し政治的案件として議論された肉刑復活をめぐる論争の歴史的意義を扱った論考である。肉刑復活論争の特徴、贊成派と反對派の論據を整理された上で、廷議などの公的な場での贊成派と反對派の論争とは、實際には肉刑の中でも死刑に代替されていた斬右趾のみの復活に關して言えば、兩者の間には根本的な見解の相違はなく、ただその實施時期を尙早とするか否かにおける對立に過ぎなかったが、結果的に「權威の確立」を優先する贊成派は肉刑と不可分の殘虐なイメージを拂拭することが出來ず、「輿論（人心）の支持」を優先する反對派が優位のうちに、皇帝によつて打ち切られ、肉刑復活は實現しなかったことが指摘される。

第二章では、「權威の確立」を優先するという點において肉刑復活とも通底する宮殿造營を積極的に推進した曹魏の明帝が扱われる。南宋・袁樞『通鑑紀事本末』卷一〇で「明帝奢靡」という項目を立てられ、否定的な評價がなされる明帝であるが、その政策全體の再検討によつて得られるのは、對外積極策よりも律令の制定・新曆の發布などの内政に力を入れ、王朝・皇帝の威信を高

めることに腐心する姿勢であり、「壯麗に非ざれば、重威なし」（『史記』卷八・高祖本紀漢八年（前一九九））という前漢の蕭何の故事を踏まえた宮殿造營も、制度を創設して權威を確立することにより、曹魏王朝を完成させる目的の一環からなされたものであった。しかし、肉刑復活は斷念したもの、重臣たちの時期尙早という反對を押し切つて宮殿造營が斷行され、それが一方では皇帝側近に貴威を重用する傾向と表裏をなす帝室曹氏の維持という私的な要素も含んでいたため、「奢靡」というレッテルを貼られた。そしてかかる權威の確立への指向とは、煎じ詰めれば魏晉期の皇帝權の弱さに由來するものであり、魏晉國家が抱えていた共通のジレンマであつたとされる。

第三章では、西晉の武帝によつて創設された國子學が論じられる。國子學は古文學系の『周禮』地官司徒・師氏條を典故として命名されたことは、その設立を建議した王肅とその子・王恂であつたことと深く關係していることを指摘した後、國子學の組織・學舎の位置に關する整理を行う。續いて創立年に關して咸寧二年（二七六）說（『晉書』卷三・武帝紀に據る）、咸寧四年（二七八）說（『晉書』卷二四・職官志・太常條に據る）、元康三年（二九三）說（『南齊書』卷九・禮志上）がある中、かかる三說を整合的に理解しようとする呂思勉・高明士兩氏の說を批判的に繼承し、咸寧二年の詔敕、咸寧四年の施行、元康三年の完成という新說を提示する。そして貴族の子弟を學生とし、儒學に通じた名族出身の學官を配置した「清」なる國子學創設とは、本來の教育・學問の場から避役を目的とする「濁」の場に墮ちた太學を改革し、中央官學の「二學」體制の確立を意味するが、その背後に

は「過酷」の曹魏とは違った、「寛容」なる禮敎國家の建設を志向し、敎化を重視した武帝の政治意識があったとされる。ただし、かかる武帝の國子學への熱いまなざしは、齊王攸歸藩事件の際にその學官がこぞって歸藩に反對したことで冷淡に轉じたと推察される。

第四章では、前章で言及された「晉辟雍碑」が總合的に検討される。まず該碑に關する先行研究が整理された上で、該碑の現狀が紹介され、碑陽・碑陰の釋文の分析が行われている。かかる考證を通じて、碑陽では秩序の回復と禮敎の復活という觀點からの西晉王朝の樹立過程と、辟雍で行われた學禮に臨席した武帝・皇太子衷（後の惠帝）のうち、特に後者を頌する内容に重點が置かれていること、また碑陰は題名であつて、立碑した學禮關係者である學官以下學生に至る四百餘人が刻されていることを明らかにされる。そして學生を中心に自發的に立てられたように見える該碑が、魏晉における立碑の禁を勘案すれば、實際には武帝の肝煎りで立碑されており、その目的とは國子學の設立と同様、「寛容」を標榜していた西晉王朝の禮敎重視政策による視覺的な權威の宣揚、それに皇太子の「暗愚」を否定して逆に顯彰することであつたと指摘される。

第五章では、八王の亂を引き起こした當時の國家體制と社會の狀況が論じられる。まず抗争の経緯が整理され、そこには權力を掌握した外戚・宗室の私權化とそれに對する輿論の反撥という一連の動きを環節として、個々の抗争が相互に連環していること、そして繰り返される抗争を推進したのが輿論の力であつたことが考察される。次に齊王冏への批判と齊王攸歸藩事件を事例として、

かかる輿論とは、公權としての國家の安定と存續を願望する精神に基づき、士大夫が權力者による國家の私權化に對する諫争として表れているとし、その源流は後漢末の清流運動に遡るとされる。しかしながら、輿論に基づく「起義」の後、外戚・宗室を私權化に走らせるのは、輿論によつて形成された貴族制から疎外されて諸王の幕下として仕え、權力を指向する寒門寒人層の集團であることから、この意味において、八王の亂の本質はかかる輿論の歴史的展開の結果であり、かつ貴族制の理念と現實の矛盾であるとされる。

第六章では、前章に續いて八王の亂でなぜ宗室諸王が主役とならざるを得なかつたのかという視座から議論がなされている。本章では、まず宗室を抑壓した曹魏とは異なり、西晉では宗室が優遇され任官も可能であり、しかも軍事面ではとりわけ將軍號を帯びて都督として出鎮するのが典型であり、主要な都督は皇帝との血縁により中央と地方との紐帶ならびに「藩屏」としての役割を期待されていた彼らに獨占されていたことが確認される。そして宗室諸王は都督管轄下で大幅な裁量權を有し、その地において地方の人材を將軍府（軍府）に辟召し、かつ中央官を登用することができ、彼らが代表する輿論と結びつく可能性を有していた。かかる宗室諸王の舉兵に根據を與えたものは、亂前半では「矯詔」や皇帝の意思として戰鬪を停止させ、或いは非常時に皇帝の意思を傳達する手段として用いられる「驕虞幡」、それに皇帝自身を奉ずることであり、亂後半では「藩屏」として出鎮した皇帝の「親親」たる宗室諸王自身の立場と士大夫に代表される輿論の支持であつたとされる。

右の政治篇に續くのが、社會篇であり、その最初に配置される第七章では、八王の亂の一齣である永康元年（三〇〇）趙王倫の賈皇后に對するクーデターの際に殺害された賈謐とその「二十四友」をめぐる問題が検討されている。趙王倫のクーデターの際に殺害された「二十四友」の杜斌は、豫てから趙王倫の私怨を被っていた人物であり、その他の「二十四友」が殺害されていないこととから、彼らが誅殺對象となっていた賈謐の私黨ではなかったことを明らかにされる。しかしながら「二十四友」に對する處分に關して、閻續による「黜」（免官）という刑事處分を行うべきであるとの提議や、一般輿論による「遣出」（轉出ないし左遷）という一種の行政處分を求める意識は存在することから、かかる道義的責任を問うのに近い處分が想定されたのは、彼らが飽くまで賈謐と對等な「友」という關係であつたことに起因していたとされる。そして賈謐と「二十四友」の結び付きの背景には、魏晉時代の九品中正制度下において「鄉論環節の重層構造」のうち中央・洛陽の「第三次鄉論」が地方社會から遊離した狀況、すなわち當時の名士社會に風靡していた浮華の風潮によつて齎された「互市」（賄賂と「虚譽」の交換を外國との交易に譬えたもの）に近い狀況が存在したことを指摘し、「二十四友」は權貴への附託と人物評價が絡む「熱勢」を體現する集團の一つであつたと結論される。

第八章では、『世說新語』の儉嗇篇と汰侈篇の考察から、西晉の貴族社會の氣風が論じられている。儉嗇篇と汰侈篇に收められる説話の多くは、どちらも「聚斂による過度の蓄財」という「私」的行為を前提に展開されながら、前者が「狹義の吝嗇」を、

後者が「散財」をそれぞれ語るといふ點で異なっているが、「公」的視座からすれば、どちらも同次元の「私」に他ならず、止足を守り餘剰を賑恤・救済にまわすという貴族のあるべき姿勢とは對蹠であるため、共に輿論の非難の對象となつたこと、そして特に汰侈篇全體の主題となっている「豪」に注目すると、都洛陽の官僚貴族による「散財」とは、本來、豪族が行つていた賑恤の「散」に對する「豪」の評価を本末轉倒させ、「豪」の名聲を獲得するために行つた「散」なる贅澤競争であつたことを指摘される。そしてかかる成金趣味的な西晉貴族社會に未成熟な過渡的あり方と、「鄉論環節の重層構造」をめぐる後漢から西晉への連續性と變質の一面が見出せるとされる。

第九章では、西晉・惠帝の永康年間（二九一—二九九年）、當時の貴族社會における選舉と密接に結び附いた拜金主義の風潮を批判した、魯褒『錢神論』をめぐる諸問題が詳細な譯註を通じて検討される。まず作者・魯褒が寒門ないし寒人層出身の隱逸の士、或いは『錢神論』の作者に假託された架空の人物であることが確認される。そして佚文の分析から、『錢神論』には西晉初期の成公綏の作と魯褒の作があり、前者を下敷きにして後者が成立していることからすれば、拜金主義の風潮の起こりは、一般的に言われるような武帝後半の政治弛緩・經濟好況にのみ起因したものは見なし難く、由來するところが久しかったこと、本來の文章の最後には司空公子（幣帛）重視に對する蔡母先生（清談）重視の反論部分が存在していたと想定されるが、これは蔡母先生の議論を肯定するための構成ではなく、作者は選舉における兩者のあり方それぞれ自體に批判を加えていることを明らかにし、川勝義

雄氏の見解に依據して、かかる『錢神論』の視座が後漢の逸民の
 人士の清流・濁流に對するそれを繼承するものであると位置付け
 ている。

第十章では、『錢神論』と對をなす同時代に成った警世の書・
 王沈『釋時論』が前章とほぼ同様の手法で検討される。魯褒と同
 様に「寒素」出身の王沈の作になる『釋時論』とは、後漢末・蔡
 邕『釋誨』の影響下に成った作品であり、出處論の外形をとった
 時世論の性格が強く、内容的には「門閥主義」の風靡、「名」と
 「實」が乖離した「虚譽」の列擧、獵官運動に狂奔する俗物の生
 態的描寫の三部に分けられており、その目的は權勢・權貴を中心
 にその子弟・追従者が名譽・名聲を排他的に獨占することで「虚
 譽」が生じ、逆にその對極にある「寒素」が選舉から排除される
 という圖式を提示することで時世を批判することにあつたことを
 明らかにされている。そして最後に『錢神論』『釋時論』の主題
 が、當時の「互市」による選舉の涸渫であつたことを確認される。
 第十一章では、西晉期に製作された「墓誌」の特徴が考察され
 る。著者が「B」系列として分類する地下の墓室に安置された小
 型の碑形墓誌は、形式的には碑頭の形により、圭首・圓首・方首
 の三種であり、刻文書式の定型化はなされておらず、字數は題・
 序・銘を完備しているものほど多く、書體は晉隸が大半であるこ
 とが確認され、時期的には惠帝期、地域的には都洛陽周邊とりわ
 け北邙山一帯と西郊に集中していることを明らかにされている。
 そしてかかる碑形墓誌が現住地で「假葬」された場合のみ制作さ
 れ、それが洛陽周邊という地域的偏在の要因であつたこと、また
 地上の墓碑とは異なつて、墓室内に立てられており、刻文の讀者

は第一に被葬者が想定されることからすれば、かかる墓誌が家族
 である生者と死者を繋ぐ、すなわち生者による死者の鎮魂の表現
 であり、きずなの確認であつたこと、そして「きずなが細い女
 性」の割合が多かつたことが指摘される。かかる議論を通じて、
 外在的には西晉の碑形墓誌が後漢の墓碑から北魏の墓誌銘への橋
 渡しの役割を果たすものであり、また心性史的には死生觀におけ
 る死者を畏怖する對象から思慕する對象への變化、厚葬から薄葬
 への變化の所産であることが結論づけられている。

結語では、今一度、魏晉時代史の展開と諸問題が『西晉の武帝
 司馬炎』を通じて確認され、その中に各章の研究史上の意義が改
 めて示されている。

II

以上の研究内容を有する本書であるが、その各所で言及される
 ように、概説書の『西晉の武帝司馬炎』で扱ったもしくは取り上
 げることの出来なかつた問題を掘り下げて探究する内容となつて
 おり、『西晉の武帝司馬炎』を『經書』に譬えるならば、本書は
 いわばその内容を敷衍して考究した「傳（註釋）」に當たるもの
 と位置づけることが出来よう。それだけの質・量の厚みを以て、
 本書の論考が展開されているとしても過言ではなからう。

そしてかかる各章での議論を支えているのが、著者の史料に對
 する誠實な分析姿勢であり、即斷を避けた丁寧かつ手堅い考察で
 ある。それを端的に象徴するのが、第九章の『錢神論』と第十章
 の『釋時論』を分析する際の詳細な譯注であり、それを妥當たら
 しむ政治史・社會史の枠組みを超えた、文學・藝術のなどの各分

野に亘る視座からの周到な裏付けであると言えよう。ここに理論先行で史料讀解が伴わないことを戒める嚴格な著者の意思が讀み取れるように思われる。また八王の亂などの複雑な展開を見せる政治的事象を丹念に整理され、そこに戰亂を引き起こす法則性や「黨與」のあり方を見出す等の西晉政治史に對する重要な示唆も數多く存在する。更に、魏晉南北朝史研究において、今日のよう⁽⁵⁾に石刻研究があまり盛んではなかった頃に發表された第十章も、現在もお輝きを失わないどころか、この方面の研究を志す學徒必讀の基本文獻となつて久しい。

右の如く、今後の曹魏・西晉史研究を語る上で、必讀の意義を有する本書ではあるが、「經書」の「傳」的な性格が強いためか、各章相互の繋がりが必要しも緊密ではなく、議論としての繼承性が稀薄であり、時として政治篇・社會篇という區分を超えて親和性の強い論考が散在している點が構成上惜しまれる。例えば、政治篇の第五章・第六章は八王の亂を扱う論考であるが、社會篇に入られる第七章もそれらと密接な關係にあり、また政治篇に入られる第三章と第四章も、國子學の教育制度史としての側面にかんがりの紙面が費やされていることからすれば、政治篇と社會篇という括りではなく、今少し個別具體的な表題による篇別構成が可能ではなかつただろうか⁽⁵⁾。

しかしながら、本書が「雜考」や「諸問題」に陥ることなく、終始一つの體系ある論文集としての纏まりを有するのは、全篇に通底する貴族制論が示されるからに他ならない。「あとがき」(四五三頁)で著者が、

……なお、現時點の私の六朝貴族に對する理解は、本書の序

論(第二節「筆者註」)の「貴族・貴族制・貴族制社會」で示した。ただ、川勝義雄氏の貴族制論が基本的に正しいと思うようになってゐる。何故ならば、川勝氏があまり言及されなかつた魏晉時代、とりわけ西晉においても、結果的には八王の亂を推進した原動力となつたのではあるが、輿論が存在しており(第五章)、墮落し本末轉倒したのであるが、「豪」による人物評價が後漢末以來存在しており(第八章)、後漢末の濁流勢力と清流勢力と逸民的人士という圖式が西晉の『錢神論』(釋時論)にも存在していた(第十章)など、素樸な疑問から出發した私の個別の研究の結果として、川勝氏の貴族制論の傍證となつてゐる、そういうことが續いてきたからである。

と述べるように、本書では基本的に川勝義雄氏の貴族制論に依據して議論が展開されており、この點に最大の特徴があると言える。ただし、翻つて何故數ある貴族制論の中で、川勝氏の學説が本書の論證における中心に据えつけられるのか、「貴族・貴族制・貴族制社會」でも十分な説明がなされておらず、とりわけ些か抽象的な「輿論」なるものも、具體的かつ明確に定義づけされていないように思われる。この點に關して、その他、二三の疑問點と合わせて、以下に考察することとしたい。

III

著者の描く西晉社會像に據れば、拜金主義の風潮は西晉國初より既に存在し(第九章)、かつ少なくとも地方社會から遊離した都・洛陽の名士社交界における「第三次鄉論」の場では浮華の風

潮が風靡しており、このため選舉には「互市」と稱せられる溷濁が生じ（第七章）、權勢・權貴を中心に彼らへの追従者が「虚譽」を排他的に獨占することで、その對極に位置する「寒素」たる寒門・寒人層が選舉から排除された（第十章）、ということになる。とすれば、かかる中央社會にあつて、「公」論たるべき「輿論」とは、何者によつて擔われ、如何なる正當性を有するのであるうか。個別の官僚によつて「公」論の裝いを以て主張される議論が文字通り「輿論」である保證はどこにもない。また地方にあつても八王の亂の際に宗室諸王の下で權力を指向した寒門・寒人層に象徴されるように（第五章）、「熱勢」への飽くなき指向が見られることからすれば、ますます「輿論」の擔い手が霞んでしまふのではなからうか。少なくとも上述の社會的様相にあつては、單純に貴族・寒門・寒人などと、いずれかの階層を代表する「輿論」の擔い手を特定することは難しいであらうし、また階層を縦斷する、例えば儒教的當爲論としての「公」論を想定し、それを前提に「輿論」を設定することも、あまり有效な分析の指標にはなりにくいように思われる。むしろ、かかる中央・地方を問わず社會全體に蔓延する「私」の傾向にあつては、官・民雙方で語られる「輿論」なるものも、實は何者かの利害關係に根差した「私」を強く反映した、或いは何者かによつて意圖的に捏造され喧傳された一種の「私」論に墮している可能性が高いように感じられてならない。そのように考えれば、八王の亂において宗室諸王の「起義」を正當化するために用いられた「輿論」なるものの出所も、第六章で論じられる「矯詔」と同様に詐稱・假託されて利用された「輿論」とも理解することは可能であり、更に考究す

べき問題を多分に孕んでいると言えよう。かつて葭森健介氏が『西晉の武帝司馬炎』の論評において指摘された「公」と「私」の概念の明確化とその定義の問題は、本書においても依然解決されていらない印象を受けるのである。

次に、八王の亂に至る曹魏・西晉宗室諸王に對する理解であるが、政治篇で著者は「過酷」の曹魏に對して、「寛容」を志向した西晉（特に武帝期）、對比的理解としては前者が權威を、後者が輿論をより重視・優先していると指摘され、その中で「曹魏が宗室諸王を除く貴戚に頼つたのに對して、西晉は宗室諸王の冷遇が曹魏の滅亡の要因である事實を前車の轍とし、逆に宗室諸王を優遇し、藩屏を期待したが、その宗室諸王による内亂を招き」（六九頁）、滅亡したと位置附けている。しかしながら、かかる宗室諸王の待遇をめぐる圖式的な捉え方は、危險であるように思われる。というのは、曹魏の宗室諸王が直接かつ本格的に「冷遇」・「抑壓」されるのは、『晉書』卷一・宣帝紀嘉平三年（二五二）四月條に、

其（王凌）の餘黨を收め、皆な三族を夷し、并せて（楚王）彪を殺す。悉く魏の諸王公を録して鄴に置き、有司に命じて監察せしめ、交關するを得ざらしむ。

とある、王凌による楚王彪の擁立未遂事件後における、曹魏宗室の鄴への集住と彼らに對する監視からであり、かかる「過酷」の處遇を行ったのは當時執政していた司馬氏に他ならなかつたからである。曹魏滅亡後は身内に「寛容」になるのは、ある意味當然であらう。「過酷」の曹魏から「寛容」の西晉へ、といった歴史像は、多分に司馬氏に都合の良いように操作された、前代史に對

する書法に左右されているように思われてならない。歴史研究においては、これまでの「通説」とされていることを、どこまで「事實」として取り扱い、立論するかが絶えず問われるのであるが、この點、今少し事實關係の整理が必要であつたのではなからうか。

最後に、第六章で議論される、皇帝の意思として戰鬪を停止させ、或いは非常時に皇帝の意思を傳達する手段として用いられるとされる「騶虞幡」について。著者は、一九八五年に本章の元となつた論文が發表されて以來、『資治通鑑』卷八二・晉紀元康四・惠帝元康元年六月條胡三省註と『廿二史劄記』卷八・晉書・騶虞幡條の解説を論據として、一九九五年に刊行された『西晉の武帝司馬炎』でも「戰鬪をやめさせる天子の意思を傳えるのは仁獸を縫い取つた騶虞幡であり、白虎幡は逆に戰鬪を鼓舞するため旗指物であつた。」(二四一頁)と説明されるが、これについては、一九九四年に『文史』掲載論文で李步嘉氏が既に詳述しているように、「騶虞幡」なるものが唐修「晉書」にしか見えず、それに先行する晉史料では該當箇所「白虎幡」と記されていること、騶虞と白虎は古來より同類と看做されていること、そして唐の高祖・李淵の祖父「李虎」の諱字を避けて白虎が騶虞に改められたと考えられることから、「騶虞幡」は「白虎幡」に他ならないと指摘されている。よつて、著者の説は成り立たないこととなる。にも拘わらず、本書でも依然として従來の主張が繰り返されておき、自説に不利な論考を無視しているとの印象を與えかねないことを補足説明すべきではなかつただろうか。

IV

或いは筆者の誤解による無用の議論も多々あつたかもしれないが、以上、本書について内容を確認しつつ、その研究上の特色と意義、それに幾つかの問題點について述べてきた。ここでは紹介しきれなかつた本書が指し示す提言や課題も多くあるが、それらはいずれ解答を伴つた著者福原氏の新たな論著として我々に示されるであらう。その一刻も早い刊行を待ち望みつつ、書評の任を終えたい。

註

(1) 「中國歷史人物選」の第三卷として刊行された本書は、筆者の手元にある二〇〇九年六月五日奥附の版で、既に五刷に達している。なお、本書に關しては、葭森健介「西晉の武帝司馬炎の評價をめぐつて——福原啓郎著「西晉の武帝司馬炎」によつて——」(『書論』三二、一九九九年)を参照。

(2) この渡邊氏著書に關しては、拙稿「書評・新刊紹介 渡邊義浩『西晉「儒教國家」と貴族制』」(『唐代史研究』一四、二〇一一年)、安部聰一郎「書評 渡邊義浩『西晉「儒教國家」と貴族制』」(『中國研究月報』六五—一、二〇一一年)、村田哲也「書評 渡邊義浩『西晉「儒教國家」と貴族制』」(『史學雜誌』一二—一三、二〇一二年)を参照。

(3) 「鄉論環節の重層構造」とは、著者が依據する川勝義雄『六朝貴族制社會の研究』(岩波書店、一九八二年)所收の「魏・西晉の貴族層と鄉論」(一九七〇年初出)で展開される

學説で、郷里での第一次郷論、郡での第二次郷論、中央での第三次郷論という構造を有する。

- (4) 註(3) 川勝氏前掲書所収の「漢末のレジスタンス運動」(一九六七年初出)。

- (5) その他、紙面の都合があったのかもしれないが、第十一章の内容と深い關聯を有する、本書の「参考文献一覽」に挙げられる著者の「中國、西晉王朝における女性の墓誌」(『Mare Nostrum 地中海文化研究會研究報告』Ⅱ、一九八九年)、同「晉代の女性と家族の特徴に關する一考察」(京都外國語大學『COSMICA』三三・二〇〇三年)、同「西晉の荀岳墓誌の検討」(『京都外國語大學研究論叢』七五、二〇一一年)が加えられる、墓誌篇を設けられた方がより各篇の厚みが増したのではなかろうか。

- (6) 「貴族・貴族制・貴族制社會」では、内藤湖南以來の「京都學派」の六朝「貴族」に關する學説が整理されているが、六朝「貴族」問題と不可分である時代區分論争には、何故か言及されておらず、この點で本書の研究史上における立ち位置を悩ましくさせている。「参考文献一覽」に挙げられる著者の「日本における六朝貴族制論の展開について」(『京都外國語大學研究論叢』七七、二〇一一年)の本書への再録を行い、著者の視座をより明確にすべきではなかったか。この他に六朝「貴族」をめぐる研究史の整理に關しては、中村圭爾

「六朝貴族制論」(谷川道雄編著『戰後日本の中國史論争』所収、河合文化教育研究所、一九九三年)、川合安「六朝隋唐の「貴族政治」」(『北大史學』三九、一九九九年)、同「日本の六朝貴族制研究」(『史朋』三八、二〇〇七年)などを参照。なお、第十章で「東晉南朝に存在する典型的な門地二品」(三四八頁)なる理解が見えるが、近年、川合安「門地二品について」(『集刊東洋學』九四、二〇〇五年)によって、この時代にかかる整然と等級化づけられた家格の不存在が明らかにされている。この點、六朝貴族制を考察する上で、看過できない指摘と見られるが、なぜか本書では取り上げられていない。

- (7) 註(1) 蓀森氏論考。

- (8) 「三國志」卷四・齊王紀嘉平三年條によれば、楚王彪は六月に死を賜っている。

- (9) この事件以前の曹魏における諸王政策に關しては、拙稿「曹魏至親諸王攷——『魏志』陳思王植傳の再檢討を中心として——」(『史朋』三八、二〇〇五年)を参照。

- (10) 李氏「白虎幡考辨」(『文史』四〇、中華書局、一九九四年)。

二〇二二年三月 京都 京都大學學術出版會
A五版 八十五・一三頁 七六〇〇圓